# 「妊婦の妊娠中の不安が分娩予後に与える影響」

分担研究：妊産褥婦へのエモーショナル・サポートに関する研究

研究協力者
北里大学医学部産婦人科　西島正博、吉原一

要約：妊娠中に妊婦の持つ不安が分娩予後に与える影響を調べるために、妊娠中期（25.4 ±1.5 週）と妊娠後期（30.4 ±1.6 週）に STAI ( State Trait Anxiety Inventory ) を用いて不安尺度の測定を行い、分娩予後との関連を調べた。対象は産科合併症のない初産婦１１７例である。その結果分娩所要時間が１７時間以上の群では１６時間以下の群と異なり妊娠中期の状態不安が後期にかけて有意な低下を示さなかった。同様に分娩時の出血量が 500 ml 以上の群では 500 ml 未満の群と異なり状態不安の有意な低下が認められなかった。また新生児の体重を比べてみると、SFD を出生した母親の状態不安は妊娠中期から後期にかけて有意な低下が認められなかった。以上の結果から妊娠中の母体の不安状態の持続が分娩予後に大きな影響を与えることが示された。

見だし語：母親学級、選択的誘発分娩、STAI,　状態不安、特性不安

研究方法：平成８年５月から１１月までに北里大学病院に通院した妊婦で、産科合併症のない初産婦１１７例を対象とした。対象の平均年齢は 28.8 ±4.5 歳であった。妊娠中期（25.4 ±1.5 週）と妊娠後期（30.4 ±1.6 週）に STAI を用いて不安尺度の測定を行い、同時に質問紙によるアンケート調査を行った。分娩は全例北里大方式の選択的誘発分娩を行った。すなわち妊娠３９週を目安に外来であらかじめ分娩誘発の日を決め、誘発予定日の前日に入院の上、ラミナリア桿あるいは PGE2 経口錠による前処置の後、人工破膜を行い内側法による分娩監視下に、オキシトシンによる分娩誘発を行った。統計学的検討には Student-T test を用い、p 値が５％以下をもって有意と判定した。データは全て mean ± S.D. で示した。

結果：全例正期産に至り、出生体重は 2982.8 ± 324.5 gr (Mean ± S.D.)( 2178 ～ 3738 g)、出血量は 292.1 ± 311.6 ml (Mean ± S.D.) ( 30 ～ 2007 ml ) であった。アプガールスコアは１分値は２～１０点、５分値は４～１０点であった。分娩形式は頭位経膣分娩が６１例、吸引分娩が４５例、鉗子分娩が３例、帝王切開が８例であった。適応は分娩停止が２例、子宮筋腫術後の陣発、予定帝切、骨盤位で全足位、臍帯下垂による高度変動一過性徐脈、骨盤位の前期破水、前置胎盤の出血がおのおの１例であった。

１）妊娠中の不安指数の変化

妊娠中期の状態不安は、43.6 ± 8.6 （25 ～ 67 )、後期が 38.5 ± 8.0 ( 21 ～ 57 )であった。妊娠中期の特性不安は 41.9 ± 9.3 （24 ～ 70 )、後期は 39.1 ± 8.2 （23 ～ 67 )であった。これを経膣分娩例と帝切例に分けて比較してみたが有意差はなかった。一方分娩形式により頭位経膣群と吸引分娩群、帝切群、に分けて妊娠中期の状態不安と後期の状態不安の変化を見るといずれも有意に低下していた。

２）分娩所要時間、分娩時出血量と母体不安指数の変化

分娩所要時間が１７時間以上の群（９例）の中期の状態不安は 47.2 ±11.5 、後期は 41.0 ± 6.8 で有意な低下は認められなかったが（ t=1.38 , N.S. )、１６時間以下の群（９７例）では 43.2 ± 8.2 から 38.0 ± 7.9 へと有意な低下を認めた（ t= 7.80 p< 0.01 )。　分娩時出血量が 500 ml 以上の群では頭位経膣分娩例（２例）で妊娠中期の状態不安が 51.0 ± 1.4 から 42.0 ± 8.5 と有意な低下ではなかったが ( t=1.29, N.S.)、出血量が 500 ml 未満の群では（５９例）42.5 ± 7.7 から 38.0 ±

7.7へと有意な低下を示した(t=5.13, p<0.01)。同様に吸引分娩例でも分娩時出血量が500 ml以上の群(7例)では44.3±5.8 から 39.3±6.5 へと有意な低下ではなかったが(t=2.25, N.S.)、500 ml未満の群(38例)では44.7±10.0 から 38.2±8.4へと有意な低下を示した(t= 5.83 p<0.01)。

3)児の発育度と母体の不安指数の変化

新生児の出生体重がSFDであった群(3例)の母体の中期の状態不安は47.3±10.8 から後期の 39.7±14.4へと有意な低下を示さなかったが(t=1.38, N.S.)、AFDであった群(110例)では43.5±8.6から38.4±7.9 へと有意な低下を示した(t=7.95, p<0.01)。

考察:STAIにおける状態不安は刻々変化する不安状態を表し、特性不安は不安になりやすい性格傾向を反映している。今回妊娠中の妊婦の不安が実際の分娩に対してどのような影響を与えるかを調べた。北里大学病院では開院以来選択的誘発分娩を実施してきた。但し全例が外来で設定した日に分娩になる訳ではなく、入院予定日前に自然陣発や破水などで分娩に至る例もある。我々の今までの研究では、予定通りの日に分娩になった例(誘発群)と早目に分娩に至った例(陣発群)の母親学級前後の状態不安の変化を調べたところ、誘発群では母親学級受講後に不安指数が有意に低下しているのに対して、陣発群では母親学級後に有意に低下していないことが判明した。すなわち陣発群では妊娠中不安が持続していたと考えられた。さらに妊婦の不安内容を調べた結果では、家族関係では夫の家族と一緒に暮らしている例の不安指数が高く、夫以外の育児協力者の有無をみると高不安群において協力者「なし」もしくは「未定」と答えた者が有意に多く、妊婦に対する夫の理解度は、高不安群において「解ってくれない」もしくは「どちらともいえない」と答えたものが有意に多かった。妊娠した時の気持ちについては、高不安群において「嬉しくなかった」もしくは「どちらともいえない」と答えたものが有意に多かった。不安の要因をみると、「分娩」については「とても心配」と答えたものが高不安群に有意に多かった。

Osmar (1)のReviewでも明らかなように妊娠中の不安の強い妊婦は早産になる傾向がある。今までの研究でも分娩誘発予定日前に陣痛発来や破水によって分娩になった群では母親学級前の状態不安が母親学級後に有意に低下しなかったことから、不安状態の持続が誘発予定日前の分娩開始につながっていると考えられる。陣発群の不安の高い状態の持続がストレスホルモンであるカテコラミンの遊離を促すと共に、オキシトシンの分泌を高める。さらに子宮筋のこれらの物質に対する感受性が亢進し、容易に子宮収縮が起こるようになる。Sandman (2)らは母体のストレスがACTHとCortisolの分泌を促し、早産につながると報告している。また副腎皮質ステロイドの遊離により感染に対する免疫能が低下し、絨毛膜羊膜炎を経て子宮筋の収縮を促進させるという考えもある。

分娩への影響を見ると 分娩中の産婦の不安尺度は血中エピネフリン、ノルエピネフリン濃度と正の相関を示し、これらの濃度は分娩所要時間と正の相関を示す。すなわち産婦の不安がカテコラミンの分泌を介して子宮筋の収縮を減弱させ分娩時間の遷延を招くと考えられる。今回の分娩所要時間が17時間以上の群では妊娠中の妊婦の不安状態が持続していたと考えられる。さらにこの分娩時間の延長は子宮筋の疲労を招き分娩時出血量の増加につながる。

産婦の不安は子宮筋の収縮だけでなく、子宮胎盤血流量にも影響を与える可能性がある。Bhagwanani (3)らは母体の不安レベルは新生児の低出生体重に関連すると報告している。今回のデータでも例数は少ないもののSFD児を出産した例の妊娠中の不安指数の低下が認められなかった。

人間においては心と体は密接に結びついている。この状態は妊娠中でも同様で、妊娠中の精神的な安定が安全な分娩にとって必要不可欠であることが今回の研究全体を通じて明らかにされた。今後は具体的には妊婦の持つ不安に対してはまず集団的指導である母親学級で不安の軽減を図り、さらに母親学級後にも不安の高い妊婦には個別指導を行い、具体的な不安の内容を調査して精神的な援助をする必要がある。従来の産科外来では妊産婦の体の異常を中心に診療を組み立てていたが、今後は心のケアーも必要になると考えられた。

文献:(1) Osmar H, et al : Psychological factors in preterm labor: Critical review and theoretical synthesis. Am. J. Psychiatry. 145 :1507 - 1513, 1988.

(2) Sandman CA.,et al : Maternal stress, HPA activity, and fetal/infant outcome. Annals of the New York Academy of Science. 814 : 266-275, 1997.

(3) Bhagwanani S.G.,et.al : Relationship between prenatal anxiety and perinatal outcome in nulliparous women : a prospective study. Journal of the National Medical Association. 89 : 93-98,1997.

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

要約:妊娠中に妊婦の持つ不安が分娩予後に与える影響を調べるために、妊娠中期( 25.4±1.5 週)と妊娠後期( 30.4±1.6 週)に STAI ( State Trait Anxiety Inventory )を用いて不安尺度の測定を行い、分娩予後との関連を調べた。対象は産科合併症のない初産婦 117 例である。その結果分娩所要時間が 17 時間以上の群では 16 時間以下の群と異なり妊娠中期の状態不安が後期にかけて有意な低下を示さなかった。同様に分娩時の出血量が 500ml 以上の群では 500ml 未満の群と異なり状態不安の有意な低下が認められなかった。また新生児の体重を比べてみると、SFD を出生した母親の状態不安は妊娠中期から後期にかけて有意な低下が認められなかった。以上の結果から妊娠中の母体の不安状態の持続が分娩予後に大きな影響を与えることが示された。